掌編小説

白樺林にて

高田三郎

「田中先生は、理系なのか、文系なのか、いったいどっちなんですか」などと、圭介は仲間内から聞かれることがあった。圭介と同じ大学の外国語教官室に属する彼は、その時は続けて、

「今度の翻訳は、生物学の本でしょう。そんな本を訳すのも、理系の証しかも知れないじゃないですか。何よりも、今度の本は、先生がお書きになったかのようにしっくり訳せている。本当は理系なんじゃないですか」と言った。

今度の本というのは、確かに圭介が初めて手がけた理系の本であった。それは偶々、ロシア語選択の学生用の読本を探していて見つけたのだが、読んでいるうちに引き込まれてしまい、とうとう翻訳まで行ってしまったの

だった。

彼は、今まで、理系か文系かなどということにはこだわっていないつもりで来たのだが、彼の日常の言動に、何か、そう聞かれるようなものがあったのかも知れない。

今度の本にしてからが、彼の教員生活の四半世紀にならんとするなかで、仕事として翻訳してきたロシア語の歴史とその関連分野の書物が、ここにきて底を突いたかの感がして、ちょっとした心変わりを起こしたかのように始めたものであった。次第に面白くなってのめり込んだのである。それも、何か、深いところで彼の本性がうごめいた結果なのかも知れないのだが、その時の彼には全くその自覚がなかった。

圭介は、秋めく東シベリアを行く列車の窓から、うちつづく白樺の林を眺めていた。列車は徐々にスピードを緩め、やがて林の中の小さな駅に停車した。「ベリョーゾヴィイ」と

駅標に書かれている。列車は停まったまま動く気配がない。青空に映える白樺の黄葉が、圭介を、有るような無いようなプラットホームに降り立たせた。

乗務員の影が見え隠れする車両の入り口まで行って、どのくらい停まるのか、と聞いてみた。

「まだ半時間は停まるでしょう。行き違い列車が来るまでは動きません。」とロシアの女性にしては小柄な車掌がいった。

「じゃ、そのあたり、白樺の林を眺めてきます」

女車掌は、少しびっくりしたような顔をしたが、うなずいてにこっとした。彼は、白樺の林に踏み込んでいった。女車掌が、背後から、

「余り遠くに行ったら置いて行きますよ」と言った。

少し歩くと、まるで収容所を思わせる古び た木造建物が横たわっていた。その手前に線

路に並行した道が左右に伸びていた。列車の進行方向に歩くのなら、万一、列車が動き出しても何とかなるだろうと、あまり当てにもならないことを考えながらその道を列車の進行方向へと歩き出した。白樺の林は、道の両側に前方へと伸びていて果てが見えなかった。

ふと気がつくと、色づいた白樺の葉が、一陣の風にはらはらはらはらと散り始めた。その風は、あちらこちらに動きながら止まることなく吹き続け、落葉もまた止まることなく落ち続けた。全ての木から落葉しているのではなく、二、三割ほどの木から落ちているのだが、それだけにしても見渡す限りの白樺林であちこち次々と落ちているのは見ものだった。日本では決してお目に掛かれない風景であった。

それを見ている内に、圭介は、昨年の秋、父親が逝ったときのことを思い出した。

菩提寺のある函館は深い秋だった。周囲の木々は、エゾマツの濃い緑以外は立ち枯れた

樹枝の色合いに包まれていた。そんな中、カラマツの黄色に色づいた針葉が、寺院の庭で突然の風にいつまでも散り続け、参列者の目をしばらく釘付けにしたのだった。

圭介の父親は、大手の貿易会社に勤め、戦前からソ連で仕事をしてきた。一九五八年に日ソ共同宣言により両国の国交が回復され、その後は、駐在員として六年ほどナホトカで勤務した。父親は当然、ロシア語に堪能だったが、それとは別に、動植物についても学者並みに詳しかった。

圭介は、小学校高学年から中学三年にかけて現地の学校に通ったのであったが、父親は、圭介を郊外の森にしばしば連れて行った。散歩であったり、時に植物や昆虫の採集であったり、バード・ウォッチングであったりしたが、その経験を通して圭介の感性には、極東ロシアの自然の季節ごとの移りゆきや動植物の姿、そしてその名前などが植え込まれていった。

圭介は、自ずからロシア語を日本語と同じように使うことが出来た。彼は、父の転勤に伴って函館に移り住んでから高校を終えると外国語大学に進みロシア語を専攻し、卒業後は、学芸大学でロシア語の教師となった。モスクワ留学を経て翻訳もいつの間にか多数手がけるようになっていた。主に、ロシア語の言語発達史に関する専門書であった。

白樺の黄葉がひときわたくさん舞い上がり、圭介の追憶を断ち切った。

今回、圭介が翻訳中の本は、ロシアの学者による『シベリア生態紀行』であった。圭介には、極東シベリアの植物や動物が織りなす風景について、そこに書かれているいくつかがイメージとして理解できなかった。圭介が経験した沿海部とそこに書かれた内陸とでは何か違いがあるのではないかと思われ、その紀行の舞台に足を運ぶこととしたのであった。

父と歩いたナホトカ郊外の森でも白樺の林にはお目にかかっていたけれど、目前でこん

なに激しく落葉するところには出会ったことはなかった。圭介は、ややしばらくその白樺の落葉に見入っていた。すると、父の葬儀の時のカラマツの落葉とはまた違ったイメージで生命の輪廻のような想念が思い浮かんできた。あの時は、父親の死が、自然界の生命（いのち）の受け渡しとして自分につながっていることをカラマツの落葉を背景に思ったのであったが、今は、もっと根源的な意味合いを湛えて、混沌とした姿で生命の輪廻が浮かんできた。しかし、はらはらはらはらとうち続く微かな音の重なりのすばらしさに心が奪われたためだろうが、それ以上に具象化することはなかった。

ハッと気がつくと、遙か後方で列車の汽笛が鳴っていて、圭介は急ぎ足で駅に向かった。

その旅行のおかげで、同じ極東シベリアといっても、沿海部とは植物や景観にいろいろと違いのあることが分かって翻訳も首尾よく終らせることが出来たのであった。

しかし、同時に圭介の胸には、あの時の生命の輪廻の想念がぼやっとしたまま沈殿したのであった。それが、何であるのか、明確な輪郭がえられないまま数年が経過していった。

ある年の春、モスクワからヴォルガ上流部の旅をした時のことであったが、その頃に読み進めていた書物を振り返っている最中にそれがふと脳裏に浮かんだのであった。

圭介は、ロシア語の書物や文学書を、当然のことながら仕事として読んできたのであるが、最近は、読書領域が自然界のことに移行しつつあるのを感じていた。それは、子ども時代にナホトカ郊外の自然に囲まれて育ったことが関わるであろうことには容易に思い至るのであるが、もっと根源的なところに原因があるのではないかと思い始めていた。

圭介のこれまでに読んできた自然を扱った本を振り返ってみると、アルセーニェフの『デルスウ・ウザーラ』は、若いうちに読んだ

書物として大変強く印象に残っている。デルスウの耳目が人並み以上によく利くだけでなく、虎や大木の気持ちまで分かるという彼の経験知の不思議とそれとともに醸し出される親しみに満ちた人柄は、現代文明にない貴重なものと思えた。

プリーシビンの自然誌からは、スターリン時代、農村の人びとがロシアの豊かな自然の中でどのようにして日常生活を送っていたかとともにスターリン体制への静かな批判をも読み取って、それが必ずしも深読みとは言えないだろうと思ったものであった。何よりも人々が自然の一部ともいえそうな日々を送っていることが好もしいことと思えた。

スターリン時代にもてはやされていたミチューリン、ルイセンコの生物学ないし農学、ヴェ・イ・ウィリヤムスの土壌学の啓蒙書を注意深く読んでみた。啓蒙書だけでなく科学論文にも眼を通してみた。そして、それらには直感的な違和感を覚えた。そして、それが

マルクス・レーニン主義において階級性といわれるものだとしたら、そこに合理性とかといえるほどの中身が認められない、と思ったのであるが、自分の専門でないとの思いから、公に書き記すことはなかった。ただそれと同じ時代の自然科学者の中ではチミリャーゼフは少し違うな、と思っていた。チミリャーゼフの本では、階級性という匂いはほとんど表に出ず、自然科学の論理の展開がほとんどであり、どれもこれも分かりやすさが抜群で複雑な植物生理の仕組みも目から鱗のごとくに楽しく理解できた。

そういえば、学校時代の成績は、概して理科系が常に良く、国語、社会は時に良くない点を取ることがあった。もっとも、多くは暗記物としてのテストの結果だから、それが、理科系人間とか文科系人間とかいう指標といきれないことはあろう。しかし、理科系科目の場合は、思い返してみるに、授業内容を無理なく飲み込めていたことも事実のようで

あった。他方で、英語の成績は、理科系と同じように良好であったが、これは、思うに、多分、後ろから訳せなどという漢文素読式の英語理解法でなく、彼が、幼い頃にロシア語を身につけたと同じように英語に接したために、いわゆる受験英語でなく、言語としての英語が自然に身についたためだと、今、語学教師として確信を持っていうことができた。

そんなことを時々思うにつけ、自分は、本来、理科系の人間だったのではないか、という思いが強くなってきたのであった。しかし、それは、軽い思いであっても確信に至ることなく意識から離れていった。

今回のヴォルガの旅も、翻訳にあたっての現地確認の旅であった。その本は、十九世紀末から二十世紀前半にかけて活躍した生物学者のワシーリイ・イワノヴィッチ・マコフスキイが、ヴォルガからウラルにかけての植物資源調査を命ぜられ、その結果を紀行風に書いた書物であった。『博物誌』と題されてい

た。そこに記述された舞台をこの目で見てみないと気が済まないといういわば現地実証主義は、もしかすると理科系的資質によるのかも知れなかったが、今回のそれは、底本を読んでみて、そこに自分と似た感性をみるという今までにない感触要因を伴っていた。

圭介は、旅の最初にモスクワで、マコフスキイの書物の版権を持っている出版社に赴いた。そこで圭介は、その本を担当した編集者のナターシャに今度の旅行の目的を話し、マコフスキイの紀行文に関する情報を聞かせてもらった。

あと

その後でマコフスキイの経歴を見せてもらった。それをみて、不思議な感じにとらわれた。若い頃の経歴が圭介ととても似ていたのである。

マコフスキイは、父親が貿易商社に勤めていて少年時代をドイツで過ごした。帰国して師範学校に学び、卒業後再びドイツのゲッチ

ンゲン大学に留学して学位を取り、帰国後、地方大学の教員養成コースの教授になった。圭介と違うのは、マコフスキイが語学の教員でなく、生物学の教員になったところであった。生物学といっても、厳密には、生物教育を専攻する教育学であった。若いうちにはヨーロッパの理科教育に関する専門書の翻訳紹介をしていた。

ナターシャに尋ねてみた。

「マコフスキイが、資源調査を始めた経緯はどんなだったんですかね」

ナターシャの大きな丸い目玉がくりくりと動いた後で遠くを眺めるようなまなざしに変わり、彼女は話を始めた。

「彼が、学位を取って帰国したのは、一九一七年末のことでした。十月革命のすぐ後でした。帰国後に、彼は理科教育法に関するドイツの教科書を翻訳出版しました。多分、それが政府の教育人民委員部の担当者の目に留まったのでしょう。自然科学教育制度改革のた

めの審議委員に任命されました。その中で、彼は、生物資源の調査を主張したのではないでしょうか。やがて政府はその調査を開始し、彼は調査の責任者に任命されました。動植物だけでなく、地質学者、民俗学者などまで動員された広範な調査でした」

「その報告書として『博物誌』が出版されたのが一九二八年なわけですが、その後、彼はどんな仕事をしているのでしょうか」圭介は、それ以後の著書がほとんど無いことに不思議を感じたのである。出版されたのは、翻訳中のこの本が、唯一なのではないかと圭介は思っていた。

「二五年からデータ集が順次出ているのはご存じでしたかしら」

「あ、そうでしたか。知りませんでした」

「マコフスキーは、その解説版の意味も込めて『博物誌』を出したのではないですかね」

ナターシャは、本棚から一冊の粗末な装丁の本を取り出して来た。

「これは、彼が一九三三年に著した『博物誌』の第二巻です」

「それは出版されなかったのでしょうか」

「印刷されましたが発売されませんでした。でも、その後、この題名で十冊分が書かれたんですのよ。ただ、二冊目以降が出版されたのは、一九九五年以降のことでしたがね」

「そうでしたか。戦前のものしか探さなかったので見落としてしまいました」彼は、一瞬だけ、探索の目の貧弱さを恥じた。しかし、圭介は、それはさておいて質問を続けた。

「何か不都合があったのでしょうか」

「二冊目が、スターリンの方針に合わなかったのではないでしょうか」

「スターリンの方針に合わなかった、という・・・」

「二冊目以降をお読みいただくと良いのですが、多分、スターリンの民族問題、それに当時の開発計画とぶつかったのではないでしょうか。もし、これらが『ソヴィエト連邦の博

物誌』とでも振りかぶれるような本だったら、こういうことにはならなかったと思うんです」といって、彼女は片目をつぶった。

「どういうことですか」

「ケースケ。本をお貸ししますからお読みになってみたらいかがですか。三冊目以降もお持ちになりますか」

旅にたくさんの本を持つのは重荷なので、結局、三冊目まで借りることとした。

圭介は、ホテルに戻るとそれを通読してみた。二冊目は、北のアルハンゲリスクから南のコーカサス山脈南麓まで、ほぼ東経四〇度線に沿って動植物の変化をその生育環境との関係で描いていた。動植物の季節をめぐる変化が、その地域毎に生きいきと跡づけられていた。その筆致が、調査報告書というより文学者の手になる紀行文学のごとくに味があり、ながら正確だった。彼が、一冊目をを翻訳してみようと思った動機をますます強める書きぶりだった、いやむしろその筆は冴えていた。

三冊目もそのあたりはまったく同様であったが、読み始めて間もなく、新たな特徴が見えてきた。一冊目は、政府の調査隊の足どりに沿ってその調査結果を中心に従来の知見を援用しながら論を進めていたが、二冊目では、たとえば、ソヴィエト連邦南部の動植物を、調査隊の調査結果もさることながらむしろその地方の研究者の従来の研究成果を中心に取りまとめ緻密な考察を加えていた。そして、その考察の結果が、地域の動植物相は、その地域の長期にわたる自然的文明的歴史とともに成立しており、その地域の人民が歴史の中で育んできたものである、というところにあった。それは、あからさまに声高に主張する形ではなかったが、いわゆる「自然改造」批判となっていることは、冷静に読めば誰にも分かることであった。

当時、スターリンは、ロシアの辺境地帯の大開発国家プロジェクトに取り組んでいた。シベリアの森林や鉱物資源の利用、南部地域

における水資源の利用と農業開発などが代表的であり、まさに自然の大改造計画であった。マコフスキイの論ずるところは、地域の実態や、その地域人民の意向にかかわりなく進められるそれら計画の批判になっており、そのような書籍の出版は、当時のソヴィエト政府にとって誠に具合の悪いものであった。

しかし、彼は、それに抗うことを敢えてしなかったようである。多分、一冊目が印刷されることになるにあたっても何らかの妥協がされたに違いないとその書き振りからもうかがわれた。

三冊目は、中部シベリアを対象としていたが、基調は変わらずとも、主張のトーンは一層穏やかなものになっていた。穏やかになったということは、具体的な事実による論理展開が続くために熱心な読者にはより鮮やかに印象に残るということでもあった。

圭介は、昼日中（ひるひなか）には、もちろん目的のボルガ上流部の予定個所の何カ所かを地元ガイド

の案内で視察して回った。読書は、夜の部、と仕分けていた。

圭介は、街から続く白樺林を歩いていた。そこは、ボルガ河が北上していた流れを東に変えしばらくしたあたり、コストロマーの郊外であった。台地の端まで歩いてくると、急に視界が開け、低み一帯は見る限り湖のように水が広がっていた。雪が、台地の陰に残っていることはあるが、もうほとんど解けてしまっていた。その湖には、白樺がにょきにょきと立ち、まだほとんど枯れ草に覆われた小さな丘がぽかりぽかりと水の上に顔を出していた。農家と覚しき家が丘の上に建っているのが散見された。水に浸かっている小屋も見えた。そんな風景がずっと先まで続いていた。

圭介は、その風景にどこかで接したことがあるような気がした。白樺の並びを見ているうちに思い出した。モスクワのトレチャコフ美術館で見たレヴィタンの筆になる『春の氾

濫』であり、エッセイ『自然の暦』にプリーシヴィンが書いた「水の春」の情景であった。

固く凍りついた雪が解け始め、春が近づいたある日、解けて溜った水が一斉に流れ始める。それが、向こうでもこちらでも起こるので、一帯の雪原地形に応じて新しい川が出来上がり随所で溢れかえり氾濫を起こす。そして湖が出現する。この地域では、二，三日前からそれがおこり、辺り一面、水であふれかえっていた。圭介は、案内役の青年を台地上に待たせて、坂道を駆け降りていった。

水際には一艘の小舟があり、レヴィタンの絵そのものであった。薄青色の空をバックに白い幹が何本か直立し、枝の先はうっすらと緑を漂わせていた。水に浸かった白樺も高みに立つ白樺も、枝先に小さな緑の葉を開きかけていた。

白樺の枝を折ってみると、樹液があふれてきた、と書かれたプリーシヴィンの記述を思いだし、それを真似てみた。すると、まった

く書いてあるとおりに白樺の細い枝から無色透明な液体がプクッとふくれだしてきた。

その途端、圭介の口から、生命（いのち）が溢れる、と声が出た。無色の液体が、動物の赤い血潮と同じ生命（いのち）の象徴に思えた。そして、かつてシベリアのベリョーゾヴィ駅近くで見た白樺の果てしない落葉に生命（いのち）の営みを感じたことを思い出していた。秋、大地に散っていった生命（いのち）が、春、ここでは透明の血潮に乗って甦っている。あの秋に感じた生命の輪廻が、今また眼の前に樹液の流れとして現れた。圭介は、大自然の生命の輪廻の中に自分も組み込まれていることを思い血潮の高鳴りを感じ立ちつくした。

そして彼は、マコフスキイが博物誌全十二巻を書くにあたって、時空を延べる生命の輪廻をソヴィエトの大地の調査行から汲み取っていることを確信した。この輪廻が入れ子のように多重に展開し人間もそれに組み込まれている。自然史はその歴史でもある。全巻に

わたれば、いっそう多様な自然の摂理を汲み取り描いているに違いない。それらを全て読んでみたい、モスクワに戻ったらナターシャに相談してみよう、と思った。

電話に出たナターシャは、明日の午後なら時間が取れるという。迷わず翌日午後三時に約束を取り付けた。

彼はトレチャコフ美術館に向かった。

その日、午前の空いている時間を使って、美術館に行く道々、自分の大学時代の一時期を思い出していた。いま思うと、その時期は二年生の秋で、自分の専攻を最終的に決める時期に当たっていたのであるが、自分の進路についていろいろと迷った唯一の時期だったと思い返すのであった。

ロシア語専攻は、ほとんど既定の事実として何の疑いも持たなかったのであるが、いわゆる教養課程の授業で、生物学や心理学、地理学といった講義がとても面白く、スイスイと理解できる自分に驚いていた。理科系でも、

物理、化学よりそういう教科が面白いのであった。それで、一瞬だけ、自分が理科系向きなのだろうかと疑ったのであった。しかし、現実問題として、今から理科系に変更するのはこの大学にいる限り不可能であり、考えることを止めることにしたのであった。

トレチャコフ美術館に着き、古代ロシア建築風で煉瓦色が印象的な建物に入ると、真っ直ぐに移動展派の作品が並ぶコーナーに足を運んだ。その中でも、ロシアの風景を描いた作品を見ていった。レヴィタンの『春の氾濫』、『白樺林』、オストロウーオフの『黄金の秋』、シーシキン『森のはずれに咲く花』『樫林の雨』など、どれも絵筆によって描かれた詩のように思えた。それらの風景画には、北国ロシアの儚げだが生き生きとした生命(いのち)が描かれていた。ロシアの自然の中で生きてきたロシアの人々の姿が冴えるいくつかの風景画もあって、ロシアの森といえども人との相互作用のもとで出来上がってきたのではない

かと思わせた。

圭介は、美術館を出ると大陸にしては少し湿度の高い冷たい空気を胸一杯に吸い込み、ナターシャのところに向かった。

「ナターシャ、私に『博物誌』全巻を翻訳させていただけませんか」

「その気になりましたか」と彼女は大きな目を瞬かせていった。

「はい、マコフスキーの心を日本の人々にも知ってもらおうと思うんです。人も自然の一部であり、開発にあたってそのことを考えることの大切さ、それを特に若い人たちに伝えたいと思うんです。日本でも、自然も人も、とても軽くなってしまいました。そんな時代に、いえ、それ以上に、これからの時代を考えると、そうした心はとても大事なように思えるんです」

ナターシャは、この仕事に圭介は向いていると感じていた。自然、文化、社会にわたる本を書く人も翻訳する人も、自分の専門を持

ちつつも全体を俯瞰する目を必要とする。現代こそそういう人間を必要としている。それが現代のインテリゲンツィアなんだ。圭介はまさにそれを地で行こうとしている、と圭介の話を聞きつつ思った。ナターシャは言った、「上司と掛け合ってみますわ。回答は、メールで送るわね」

圭介は、ドモジェドヴォ空港へ向かう列車の窓から白樺林が所々に薄緑色を帯びつつ広がっている様を眺めながら、ナターシャのいったことを思い出していた。

「ロシアは、これから、スターリンの仕事に改めて向き合ってみる必要があるんです。それも全面的にね」とあの目がじっと圭介を見据えていた。ふっと息をついて、

「この本を今出版することの意味はそこにある、と私たちは思っているんですのよ。出版だけでなく政治や思想など、すべての分野でそれが必要なんです」といった。

圭介には、理科系か文科系か、などはどうでも良く、この本を訳すことが自分の使命なんだと思えた。際限ない利益を追い求める眼には、生命の輪廻など視野に入らない。文理合い和す文化がそうした利益追求を乗り越えこれからの歴史を拓くのではないか。自然の中で息づく生命（いのち）を、先ずありのままに見てほしい。それにふさわしい書物が必要とされる。この本こそ、そのひとつに違いない。

列車の窓外を、離陸したばかりの大きな飛行機が音もなく上昇していった。

（おわり）